

河井寛次郎と 棟方志功

二人の巨匠

「陶磁の歴史を通じてただ一人の人」國始まつてこの方の陶工——保田與重郎はその文業中に河井寛次郎について幾度も論じ、そのつど、このような最高の賛辞を捧げた。「河井翁は、我國始つての陶工だった。もし明治以後近代の最大の藝術家といへば、私は思ふ、この翁であらう」(『日本の美術史』)。

河井寛次郎は、大正の終わり頃から柳宗悦・浜田庄司らとともに民芸運動を始め、かつて無名の工人たちがつくった陶器のもつ美を再発見し、自らも一陶工として制作に没頭した。やがて、「民衆の工芸」から「民族の造形」へと、民芸の域を超えた独自の道を志向し、陶芸にとどまらず、書画・木彫・金工と多彩な才能を発揮、さらに文章や詩においても情緒豊かな世界を描きだした。民芸の土壌の上に新しい民族の造形美を花開かせ、美の一大曼荼羅世界を築いた、陶芸界の巨匠である。



河井寛次郎

明治23年(1890)8月24日生
昭和41年(1966)11月18日歿

棟方志功

明治36年(1903)9月5日生
昭和50年(1975)9月13日歿

◀ 河井寛次郎(昭和39年頃)

▼ 棟方志功と保田與重郎(昭和32年12月)



河井寛次郎は、「世界のムナカタ」こと板画家・棟方志功の生涯の師であった。棟方は昭和十一年より河井に師事、美への信念やものづくりにおける求道的精神について大いに薫陶を受け、河井もまた、棟方の強烈な個性と純情無垢な魂を深く愛した。一方、保田與重郎は昭和十年頃に未だ無名の棟方と出会い、以来、生涯に亘り厚い親交を結んだ。保田は早くから、始原の生命が燃えあがるような棟方芸術の創造性に注目、「富岡鐵齋歿後の最大の藝術家」として讃仰の筆をさかんに振るった。また、自著の装幀を数々依頼し、棟方の装画家としての才能をいち早く世に知らしめたのである。そして河井寛次郎と保田與重郎との邂逅もまた、戦前にさかのぼる。保田は昭和十五年に河井寛次郎論を発表、すでにその天才を讃えていたが、親交が深まるのは戦後のことである。保田は再三に亘り、河井そして棟方の芸術の本質を述べひらく論を起した。

河井寛次郎と棟方志功、そして保田與重郎——三人の魂は互いに振幅し合い、手を取り合っつて、爛々豊穡な一大民族芸術をうち立てたのである。そして新学社もまた、その美の恩恵に浴すことになる。



◀ 棟方志功の装幀になる保田與重郎の著作



◀ 雑誌『天魚』（昭和33年3月創刊～昭和39年4月終刊）

『天魚』は昭和33年3月、『祖國』や『新論』で行なっていた思想を再び興すために、保田與重郎が棟方志功や河井寛次郎とともに創刊した雑誌。いわゆる「言論」によらず、民族本有の美感や造形力を具体的に示すために、写真をふんだんに取り入れ、美術・工芸・民俗を主な内容とした。

題字は河井寛次郎の揮毫、そして裏表紙の写真も河井の作品。表紙や挿画はすべて棟方であり、見返しには保田の歌を彫った板画「焔火頌（かぎろいしょう）」が連続掲載された。

編集及び発行人は、昭英社の富田ひさ子。写真印刷が未しい当時、贅を尽くした雑誌だった。



▶ 昭和38年11月、佐藤春夫は保田與重郎らとともに五条坂の河井寛次郎邸を訪問、交歓した。佐藤は河井の美しい随想集『火の誓い』（昭和28年刊）に類いまれなる「詩」をみとめ、自ら監修した新学社刊『規範国語読本』には「過ぎ去った今」の一篇を収載

『祖國』『新論』への協力

昭和二十年代、保田與重郎との繋がりがから当時吉野書房にいた奥西保や高島賢司らも、自然、河井寛次郎・棟方志功と親交を結ぶようになる。昭和二十四年の春、保田を中心とした雑誌『祖國』創刊の計画を知るや、棟方はわがことのように喜び、自ら表紙・カットを引き受け、七月にはそれらを郵送、これが『祖國』に寄せられた第一番目の原稿となった。若い同人たちはみな喜び勇み、忽ち創刊の作業が勢いづいたという。その後、終刊まで毎号が棟方の表紙・挿画に飾られ、その生命力迸る板画によって、全国の心ある人々を鼓舞した。さらに、『祖國』に引きつづいて創刊された総合雑誌『新論』（昭和三十年七月創刊）の表紙には油絵を寄せるなど、保田の関わる雑誌は殆ど、棟方が表紙を手がけたのである。

また、『新論』の頃から、保田や棟方とともに奥西・高島らも「五条坂の大師匠」と称え、河井寛次郎から生命と美と人生についての深い啓示を受けるようになる。河井は『新論』の巻頭グラビアにおいて監修役を引き受け、「民族の美の造形」をテーマとして関西各所の美しい村や古代の石造物の撮影を指揮し、とりわけ当時吉野書房の社員だった元新学社常務・黒川輝尚には、手をとって撮影の指南を行なった。

新学社という作品

昭和三十二年新学社が創業したあとも、河井寛次郎と棟方志功は美しい作品と言葉を贈り、そして社に美風をもたらしたのである。

昭和四十年、山科の新社屋建設に際しては、河井寛次郎に新学社の表札の揮毫を依頼、その雄渾高潔な書は、現在も新学社の誇りとなっている。一方、棟方志功はお祝いとして、現在も玄関ホールに掲げられる大きな板画「華狩頌」を贈った。この作品は、四方の空に向けて華麗な削り矢を射るアイヌの火祭りの儀式に着想を得、構図として、中国通溝の高句麗古墳の一つ、舞踊塚の狩獵図壁画を参考にして昭和二十九年に制作された。棟方



◀ 『祖國』や『新論』の挿画も棟方志功によるもの

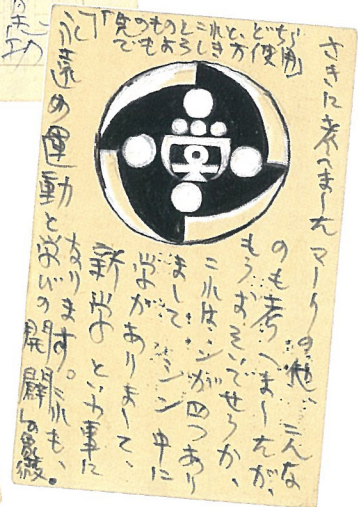
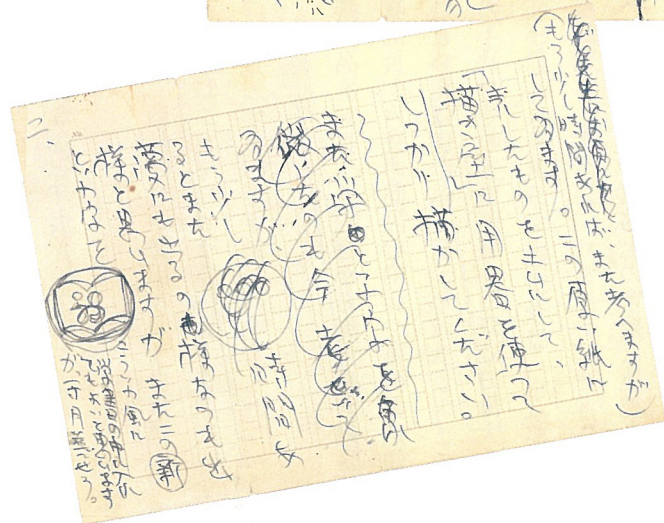
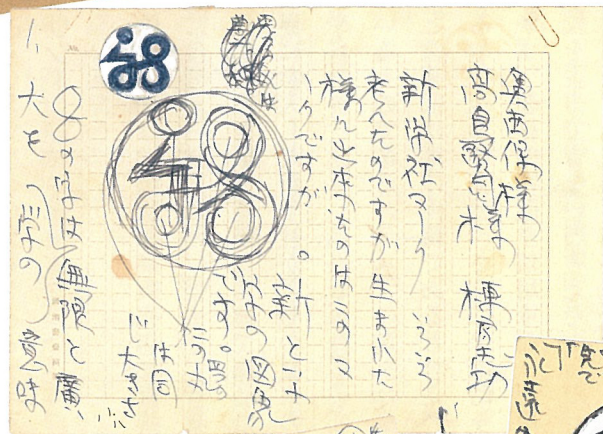


▶ 『新論』の巻頭グラビア撮影のため、畿内各所を訪れていたときの一枚。右より黒川輝尚、河井寛次郎、保田與重郎



棟方志功から届いた社章マークの原稿と書簡

新学社誕生前夜の昭和32年1月21日、正進堂印刷の二階に事務所を構え、創業の準備に追われていた奥西保と高鳥賢司のもとに、封書が届いた。中には、社章の図案とその意匠についての説明を記した原稿用紙2枚が入っていた。社章は「新」の字を図象化したものであり、「学の無限と广大」を意味すると記されている



▲棟方志功は別案も届けた。若い仲間たちの前途を、親身に思い遣っていたことがよくわかる



河井寛次郎揮毫の表札の原書



◀昭和40年8月19日、新学社本社新社屋の竣工式には河井寛次郎、そして棟方志功・チャヤ夫妻も来社。棟方は真新しい新学社表札を見て、「このビルより寛次郎先生の書のほうがいいんだよ」と楽しそうに言ったという

は自著『板極道』のなかで、制作モチーフについて「けものを狩るには、弓とか鉄砲とかを使うけれども、美を射止めるには、武器はいらない。美しい心を射止める仕事、そういうものをいいなあと、弓を持たせない、鉄砲を持たせない、心で花を狩るという構図で仕事をしました」と述べている。(二五一頁参照)

また、創業にあたり棟方に株主になってもらうようお願いすると「大いに賛成、ところで株主とはいったい何をしたらよいのか」との返事が来た。そこで、株主引き受け第一番目の仕事として社章の作成を依頼したのである。

棟方は、教材の表紙装幀や挿絵を数多く無償で提供し、時に、新たに板画を彫ることもあった。その板画に飾られた新学社の教材が、好評を博したのは言うまでもない。

こうして二人の巨匠は、美を惜しみなく恵贈した。新学社は、河井寛次郎と棟方志功による一つの作品のようでもある。



◀河井寛次郎の拓本（詩画集『いのちの窓』より）

奥西保は河井のこの言葉を愛し、時に社員にもこの言葉の深い教えを説いた。「仕事と暮しとは一つのものにて、別々のものではないということである。仕事の中に暮しがあり、暮しの中に仕事がある。世の常では、仕事と暮しとは別個のもので、対立しているものと考えているのは皮相浅薄な考え方であり誤りである。日常座臥時々刻々が仕事でない人の仕事は尋常のものに過ぎない。心のこもったものではなく、魂が入っていない」（社内報『バボテ』第56号「扁額提呈」より）この言葉を折にふれ口にし、励みとする社員も多い